

---

# 教育総合センター

## だより

---

NO. 142

平成 28. 12. 1



### 『今を最高に生きる』

常陽中学校

校長 小谷 豪郎

夢を持ち憧れて就いた教職の道も、気がつけば残り1年。振り返るととても早く感じる。

時間の経過は年齢によって感覚が違い、それは年齢で割った感覚であるとか何かの本に書いてあった。同じ1日でも20歳の頃ならば1/20の早さ、現在の私にとっては1/59の感覚ということである。

こんな話をすると生き急ぎしているようだが、残された1年を充実した年で終わりたいと思う。そして、引退後の過ごし方についても、そろそろ真剣に考えねばならない時が来たようだ。引退された先輩方に、「引退したら何をするか。キャリア教育ではないが、現役の間に計画的に進めておかなければ、いざ引退はしたものの何もできずに『定年迷子』になってしまう」と忠告していただいた。

夢を持ち、憧れて就いたこの仕事を本当に満足して終わり、新たなステージを迎えられるのだろうか。小学1年、東京オリンピックの開会式をテレビで見て、大空に五輪を描く姿に感動し、航空自衛隊ブルーインパルスに憧れた。中学1年、部活動に夢中になっている時にたまたま赴任してきた新任の体育教師の生き方に憧れた。高校1年、担任の体育教師、部活の顧問の影響で教師への憧れは確固たるものとなり、体育教師になるために大学を選択し進学した。

しかし、教員採用試験に現役合格できず、

高校の臨時講師、社会体育指導員の2年間は必死で勉強した。3度目の試験が終わり結果を待つ間に父から、「今年が駄目なら俺の仕事を継げ」と言われた。少年院の教官である。教員をめざす理由の一つに、幼少期から少年院の官舎で育って来た経験から、父の世話にならない子どもを学校で育てるという思いもあったので、その言葉に少々ショックを受けた。しかし、無事尼崎市に採用され「生涯一担任・一顧問」の思いでスタートした教職の道であった。ところが、ある出会いで思いもよらなかった道に進むことになってしまった。

教育行政の世界に15年、最初はとても悔やんだ。自分が思い描いていた教員生活とは全くかけ離れた世界に放り出された。

しかし、今では貴重な体験・学びの機会をいただいたと感謝している。最初に仕えた上司から「自分の手元の仕事・書類から現場が見えているか?」「常に現場を意識し生徒や教師を第一に考えろ」と教えられた。

校長職として2校目、私が経験したように出会いを大切に、それぞれの先生方に声をかけ主幹教諭・教頭・校長を育てたつもりだ。残された時間も、現場を大切に、私の思いを理解し繋いでいってくれる人材を少しでも育てていきたいと思う。

決心はついた。先のことより『今を最高に生きる』・・・定年迷子を覚悟して。

## ☆☆☆ユニバーサルデザイン研究部会に参加して☆☆☆

本部会は、幼稚園、小学校、中学校、高等学校と校種の垣根を越えた部員で構成されているが、3年目を迎える本年度は、小学校、中学校の部員で活動している。また、関西国際大学の百瀬准教授に専任講師として参加していただき、子ども理解の視点や研究の進め方について指導助言をしていただいている。幼児から学生に至るまでの長いステージで子どもを見ることができることが、本部会の大きな特徴である。

活動1年目は、「授業のユニバーサルデザイン化とは」と題し、授業のユニバーサルデザイン化(以下UD化)の基本理解を進める研究を行った。2年目は、小学校・中学校での実践を発表した。小学校では、3人の子どもを対象にアセスメントを行い、それぞれの子どもへの支援を盛り込んだユニバーサルな授業づくりを紹介した。中学校では、被服の授業において、デジタル教材を使用した時と使用しなかった時の子どもの意識の違いや作品の完成具合についてデータを基に検証した。

### 授業のユニバーサルデザイン化の二本の柱

誰でもわかる、取り組める、安心して過ごせる学級経営・授業づくりを考えていくことを授業のUD化という。3年間の研究活動を通してUD化は“子ども理解”と“特別支援教育の視点”の二本の柱に支えられているという考えに至った。

“子ども理解”とは、誰が・いつ・どんな点でつまづいているのかに気づき、そのつまづきの原因・背景に何があるのかを、発達・認知・育ち・環境など様々な観点から分析することである。子どもの実態を捉えておくことは、より具体的に効果的な支援に結びつけることができる。

子どもの困り感を分析することができたら、次はその困難を補うための支援を考えていく。その支援を考える時に、“特別支援教育の視点”が有効になる。特別支援教育の視点と言っても、気になる子どもを「LDだ。ADHDだ」とラベリング

する視点ではない。気になる子どもがLDやADHD傾向にあるのであれば、医学的・学術的に立証された支援の方法を参考に、その子どもにあった適切な声かけ・支援を考えていく。これが、教師が特別支援教育の視点を持つことの真の意味であると考えます。

### 今後の活動の展望

#### ～生徒指導・学力向上との連携～

今後の活動の方向性として、3年間かけて学び、実践してきたUD化の知識や有効性を学校全体へ普及させていくことを考えている。

先にも述べたUD化の二本の柱を教師が持つことは、学級経営・授業づくりのみに役立つものではなく、生徒指導上の課題解決や子どもの学力向上の一つの糸口になると考えている。例えば、問題行動が多い子どもの行動だけを見て指導や対応策を考えていると、問題行動に振り回されたり、誤った対応で状況を悪化させたりといった結果になりかねない。発達・認知・育ち・環境などの面から、行動の背景に何があるのかを丁寧に分析した上で特別支援教育の視点を活かした関わりや支援を考えることは、具体的かつ効果的な問題行動解決につながると考えている。

また、つまづきのある子どもの課題を分析し支援が盛り込まれた“参加できる”“わかる”“楽しい”授業は、他の子どもにとっても同様のことが言える授業になるはずである。そのような授業は、子どもの学習への意欲を高め、子どもの学力も高める結果につながると考えている。この二点の仮説を検証していくことが、今後の部会の課題である。

このように、UD化は、どの分野の教育にも、どの子どもにも応用することができる内容である。この視点を学校全体に広く普及させていく事の意義と効果は、とても大きいと考える。

(武庫東小学校教諭 東田 直久)

## ◇◇◇子どもが人権を受け留めるには◇◇◇

はじめに

「『人権教育』です」、という授業に何度か出会いました。歯切れの良い、誰もが納得する言葉が勢いよく飛び交っていました。しかし、多くは、表面を勢い良く滑っていく「人権」でした。

「君、人の子の師であれば」（国分一太郎著）という本があります。教師としての使命感や喜びを感じさせてくれた本でした。耳に痛い言葉が時折浮かびます。同時に、東井義雄先生の「生活の論理」を思い出しました。歯の浮くような言葉が飛び交う教室や子どもたちを育ててはいけませんという声が聞こえそうです。

### 1 親や教師の「背中」が人権を教えます

子どもは「親（先生）の背中を見て」、生き方を学びます。子どもの生活習慣や常識は、そこから始まります。子どもの感性が磨かれていきます。心が育ちます。そこに、「知識だけの人権」と「生き方としての人権」の分かれ目があるのです。

発言する子どもとだけで授業を進めたり、用事を頼みやすい子どもやおしゃべりしやすい子どもに偏って声かけしたり、休み時間にひとりぼっちの子を見過ごしたりしても平気な先生から学ぶことは、人の優劣です。そこが、いじめの温床です。

親が言う他人の悪口や先生同士の冷ややかな繋がりから、子どもは学びます。「みんな仲良く」なんて表面だけ、言葉だけで良いのだと。

### 2 教室環境は人権意識を支えます

黒板とその周り、教室の掲示物は、学ぶ力を支え、豊かな心を育てます。簡素な黒板周りを演出すると、集中力と安定した心が授業に向かいます。また、学級・学年目標や勉強の仕方などに限定して、プラス効果を考え工夫することも、子どもの心を育てます。

逆に、デコレーションが多く、黒板の左右から、忘れ物等々の記述がせまりマイナスイメージの子ども名前が一日残っている場合、授業よりも周りの掲示等についつい目がいき、勉強が分からないモヤモヤと友だちのマイナスイメージが固定されます。先生の意図した方向とは異なる子どもの成長が見られるのです。

### 3 家庭と共に、「心」を育みましょう

先生も子どもたち同士も心で人の言葉に耳を傾け、先生が、豊かで温かい背中で語り、学級経営に心を配ると同時に、家庭・地域との絆を太くして、「豊かな心」を育むことが大切です。

温かい家庭では温かい心の子どもが育ちます。明るい子どもは明るい家に育ちます。分けてあげられるほどの愛情をもらっている子どもは、愛を分け与える事が喜びになります。

子どもが変われば親も変わります。しかし、「子は親を映す鏡」です。子どもを通して、保護者の否定的な思いが聞こえてきます。そんな時、逃避せずに、その言葉に学びながら、できる限りの努力をして保護者の中に飛び込むことが大切です。結果、「先生が言うてはるんやから」と保護者が変わります。支えてくれるようになります。家庭との絆が深まります。

### おわりに

子どもや同僚の家族に不幸があっても、良く知らないからと冷たい対応の先生が、中にはおられるそうです。そんな先生が「子どもの気持ちか」とか「子どものために」とか言うのは空言です。まして、「人権」を子どもたちに語るなど笑止です。

人権教育は、子どもの日常が受け留めるのです。子どもの生活を温かい心で満たしましょう。深く心に染みこむ人権教育を進めましょう。

(元園田東小学校長 上玉利 敏昭)

## 教育情報コーナーおよび視聴覚ライブラリーについて

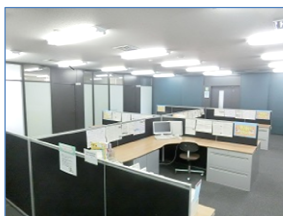
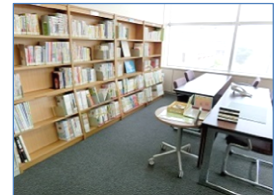


教育総合センターの移転にともない、教育情報コーナーも引っ越しました。引っ越し先は、旧トマス大学内の図書館棟（3階北側奥）です。

また、センターの移転に伴い、視聴覚センターは廃止されましたが、視聴覚ライブラリーは、改めて、教育総合センター内に位置づけられ、16ミリ映写機や16ミリフィルム・VHS・DVD等は、教育情報コーナーと同様、図書館棟に保管しています。貸出等の手続きなどは変わっておりません。教育総合センター2階で受付をしております。教育総合センターのホームページの視聴覚コーナーで調べていただいて、上玉利（電話6494-3155）まで予約を入れて下さい。受付で直接申し込まれても結構です。16ミリ映写機操作の講習会は、平成29年2月23日（木）15時30分から行いますので、電話で申し込みの上、ご参加下さい。

教育情報コーナーと視聴覚ライブラリーが、教育総合センターの研修場所（サピエンチアタワー）とは別棟になっていますので、ご不便をおかけいたしております。

先生方が効率よく活用できるように、教育総合センター3階に、「**教育情報コーナーmini**」を設置しました。新刊図書、今年度の雑誌、現行使用教科書及び指導書、前年度学校園・研究会刊行物等を置き、貸出もしています。教育総合センター開館時間の間は自由にお使いいただけます。



また、3階中央フロアは、「**学びあいスペース**」となっています。

「教育情報コーナーmini」の資料の閲覧にもお使いいただけるだけでなく、パソコン（インターネット、ワード、エクセル等が入っています）4台が使用できます。研究会、校内研修、学年の教材研究、ミーティングなど積極的にご利用ください。従来どおり資料の貸出・相談等に対応していますので、お気軽に、幾田（電話6494-3155）までお問い合わせください。※12月4日から10日は、人権週間です。そこで、情報コーナーの新刊の中から関連の書籍を紹介します。

\* 「すぐ使える“新時代の人権教材”7つのテーマ

～総合的な学習でめざす国際標準の学力」 松下一世著（明治図書）

\* 「学級担任のための外国人児童生徒サポートマニュアル」 臼井智美著（明治図書）

\* 「アクティブ・ラーニングによるキャリア教育入門」 西川 純著（東洋館出版）

\* 「シティズンシップ教育で創る学校の未来」 唐木清志著（東洋館出版）

\* 「スクールカーストの正体～クレイゴト抜きのいじめ対応」 堀 裕嗣著（小学館）

\* 「スクールセクハラ

～なぜ教師のわいせつ犯罪は繰り返されるのか」 池谷孝司著（幻冬舎）

\* 「生徒指導とスクール・コンプライアンス～法律・判例を理解し実践に活かす」

坂田 仰著（学事出版）